

スリランカにおける我が国の地雷除去支援

平成23年3月
在スリランカ日本国大使館

2009年5月、26年間に及ぶスリランカの内戦は終結しましたが、内戦の舞台となった北部州や東部州では、いまだ多くの地雷や不発弾が残されています。日本政府は、内戦の「負の遺産」である地雷の除去活動を行うスリランカ政府やNGOを支援し、人々が安心して暮らしていける環境の整備をお手伝いしています。

地雷除去を待つ1万8千人の国内避難民

2009年5月の紛争終結からもうすぐ2年が経とうとしています。しかし、約1万8千人以上の国民が現在も避難先や避難民キャンプでの生活を余儀なくされています。彼らの村の安全が確保されていないこと、つまり、地雷除去が終っていないことが帰還を妨げている大きな原因です。

紛争終結後、2010年末までに約400km²の地雷除去が終了しましたが、まだ500km²もの地域が100万個以上の地雷及び不発弾に汚染されていると見積もられています。この残りの地域のうち、最優先地域(住居地域及び農地)を完了させるだけでも今後少なくとも3～4年間、全ての地雷除去を完了させるには今後約10年間はかかると推定されています。



除去された地雷。この地雷は真上から5kg以上の力がかかると爆発する(起爆システムは地雷の種類によって異なる)。

日本の地雷除去支援

スリランカ地雷除去は、スリランカ経済開発省と同政府軍、現地・国際地雷除去団体(NGO)によって行われています。現在活動しているNGOは計8団体あり、そのうち2団体が現地NGO(Delvon Assistance for Social Harmony (DASH)、the Milinda Moragoda Institute for People's Empowerment)、残りの6団体が国際NGOです(The HALO Trust、the Swiss Foundation for Demining (FSD)、The Danish Demining Group (DDG)、Mines Advisory Group (MAG)、HORIZON、Sarvatra)。

日本政府は2003年より同国の地雷除去活動支援を始め、2010年までに東部と北部で行われた34のプロジェクトを通し、2,000万米ドル以上の資金支援を行いました。2010年度は、計903,200米ドルを2団体(DASHとHALO)へ支援し、ジャフナ県とキリノッチ県で地雷除去活動を行っています。



©DASH

手動式地雷除去活動の様子(DASH)



©The HALO Trust

帰還コミュニティへ地雷回避教育を実施(HALO)

地雷除去を通して出来ること

(1)再定住支援「やっと自分たちの村に帰って来た」

ワウニヤ県ウエリヤサムパナイ村では、2010年10月に地雷除去が完了し、現在までに約6割の住民が帰還しました。村の多くの建物が破壊され、家や学校、井戸は銃痕だらけになってしまいましたが、人々は自分の村に帰って来たことをとても喜んでます。

ある家の前を通ると、庭で畑仕事をする数人の女性たちが声をかけてくれました。そして、裏庭に広がる青々と美しい農地へ案内してくれたのです。約100m²のこの農地からは、150個もの地雷が発見されたそうです。

「地雷除去が終わった後、地雷除去団体(FSD)のスタッフが私たちの目の前で農地を歩いてくれて、『ほらね、もうここは安全な土地なんですよ』って言うてくれたの。それから安心して毎日農作業をしているわ。地雷除去をしてくれて本当にどうもありがとう。」そう言って笑う彼女たちは、もうすぐやって来る稲作の収穫時期をとても楽しみにしています。帰還後初めての収穫です。農地の状態も稲の状態もとても良いため、今期は豊作が期待できそうです。

この家に男性は住んでいません。彼女たちの配偶者は戦闘で亡くなってしまったり、現在も元兵士のリハビリ施設に収容されています。彼女たちは共同生活を通して互いに助け合い、自分たちの力で一日も早く新しい生活を軌道に乗せようがんばっています。



住民たちは互いに助け合い新しい生活をスタートさせている。「自分の村に帰ってきて嬉しい」と何度も話す女性たち。



人々の帰還が始まり村役場も再開された。相談や手続きのため、毎日多くの住民が訪れる。村長は「この村が安全になったことをアピールして、残りの住民が安心して帰って来れるようにしたい。」と話していた。



多数の銃痕が残る井戸。地雷除去団体が井戸内部の地雷や不発弾除去も行い、住民は再び安全な水にアクセスできるようになった。

(2)生計向上支援「安心して漁業ができるようになった」

広大なジャフナ湖に面するジャフナ県カチャイ村の港は、昔から多くの漁師に利用されてきました。しかし、紛争後に帰還した人々が目にしたのは、地雷で汚染され、変わり果てた村の姿でした。カチャイ港周辺の岸边にも、湖からの敵の侵入を防ぐために埋められた多くの地雷が残されていました。それでも、人々は自分たちの生活のために漁業を再開しなければなりません。地雷の被害に怯えながらも、多くの漁師がこの危険な土地を歩いて毎日港へ通いました。



©The HALO Trust
ジャフナ県カチャイ村の港。地雷が発見された場所にスティックが立てられている。



©The HALO Trust
地雷が除去され、土地が安全になったことを喜ぶクルシャナバラン氏。

HALOの活動により、2009年6月からカチャイ村とその隣村ケトペリ村の地雷除去が開始され、2010年10月までに合計約3,000個の地雷が発見されました。これら地雷の多くは、二つの村の港周辺に埋められていたそうです。

「漁師の仕事は大変だけど、地雷がなくなったのでこれからはもっと楽に安心して仕事ができる。」そう語る漁師のクルシャナバラン氏は、3人の子供を持つ父親です。村も港も安全になり、彼はより一所懸命仕事に取り組んでいます。家族も安心して港に手伝いに来れるようになりました。今では1日1,000ルピー(9米ドル)の収入を得られるようになり、一家の生活も徐々に安定してきました。同じように、この地域の平均世帯収入も徐々に向上しています。

(3) 次世代を地雷から守る

マナー県マンタイウイスト郡ジャイアントタンク周辺地域では、FSDの活動によって、2010年1月に約10平方キロメートルの地雷除去が完了しました。帰還から1年、現在この地域の人々は安全な土地で活気に満ち溢れた生活を送っています。ある学校では、多くの生徒や住民が集まり盛大な運動会が行われました。かつてはこの校庭にも多くの地雷が埋められていましたが、地雷除去活動のおかげで、子どもたちはもう地雷を怖がることなく、全速力で校庭を走ることができるようになりました。

1年間で、この地域は大きな復興と発展を遂げました。そして、学校にもたくさんの生徒たちが戻ってきました。子どもたちは新しい制服に身を包み、再建設された学校に通っています。もう二度と住民が地雷被害に遭わないように、地雷除去団体指導の下、学校やコミュニティで地雷回避教育も行われました。

「地雷を見つけたら、絶対触っちゃいけないんだよ。触ったら爆発するかもしれないから、とっても危険なの。その代わりに、ちゃんと大人の人に地雷があった場所を知らせるんだよ。」地雷除去団体やコミュニティの活動は、しっかり子どもたちにも受け継がれています。



帰還後初めての運動会。子ども達は楽しそうに競技に参加している。



地雷回避教育で学んだことを説明する女子生徒。

(4) 民族融和支援



©DASH
チームはシンハラ人とタミル人で構成されている。

恩恵を受けるのは帰還した住民たちばかりではありません。地雷除去活動は、現地の雇用も創出し、活動を通してスリランカの民族融和にも貢献しています。多くの地雷除去チームは、シンハラ人とタミル人の民族混合チームです。内戦終結まで、北部ではタミル人はシンハラ人と接触する機会はほとんどありませんでした。チームメイトは、日々の生活や仕事、レクリエーションなど、共同生活をを通して、お互いの理解を深めています。

DASHの宿舎を訪問すると、駐車場には沢山のバイクが並んでいました。チームメイトの共通の趣味は「バイク」です。バイクを買うために、またはバイクの部品を買うために、皆毎日一所懸命働いています。仕事の後、仲間たちと一緒にバイクの手入れをするのが楽しみで仕方ありません。また、皆で資金を出し合い宿舎にテレビを設置したり、敷地内に植木を植え世話をしたりと、彼らの生活も日々向上しています。チームメイトたちの間で、民族の違いによる争いは起こりません。ここから広がる民族融和は、将来にわたりスリランカに大きく貢献し続けると皆が信じています。



©DASH
共通の趣味と仲間を大切し、毎日楽しく過ごす地雷除去メンバーたち。

(了)